

デカルト『方法序説』について

学 長 利 光 功

東京に雄松堂という古書店があり、過日、創業75周年記念行事の案内が送られてきた。10月から11月にかけて開催されるいくつかの行事のひとつに、《日米のビブリオフィルが語る「世界を変えた書物」》というフォーラムがあった。それはマイケル・ライアン氏（コロンビア大学図書館 Rare Book and Manuscript Library 館長）が、1. René Descartes ; Discours de la Méthode, 1637. (デカルト「方法序説」)、2. Abraham Lincoln ; The Gettysburg Solemnities, 1863. (リンカーン「ゲティスバーグ演説」)、3. Karl Marx ; Das Kapital, 1867. (マルクス「資本論」)、4. Sigmund Freud ; Die Traumdeutung, 1900. (フロイト「夢判断」)の4冊の書物について、高宮利行氏（慶応義塾大学文学部教授）が、1. Bible, in Latin, c.1455. (ゲーテンベルク聖書)、2. Nicolaus Copernicus ; De Revolutionibus Coelestium, 1543. (コペルニクス「天球の回転について」)、3. Charles Darwin ; On the Origin of Species by Means of Natural Selection, 1859. (ダーウィン「種の起源」)の3冊の書物について語る、という内容であった。

マイケル、高宮の両氏がどのような話をされたのか知らないけれども、上掲の7冊の書物がそれぞれある面で「世界を変えた」と言えるのは確かであろう。ここでは最初に挙げられているフランスの哲学者ルネ・デカルト（1596-1650）の著作『方法序説』が、どの面で世界を変えたのか、簡単に述べてみたい。

この書の第4部には、真理の探求の過程で、不確かなもの、疑わしいものを排除しようと考えている結果、そう考えている「わたくし」の存在は疑いようもない真理であるから、「わたくしは考える、それゆえわたしは存在する (je pense, donc je suis)」という真理を、哲学の第一原理とすると書かれている。そしてついでこの「わたくし」は、身体 (le corps) とは区別された魂 (l'âme) のことであり、第5部では身体を、精密な運動をするひとつの機械 (une machine) とみなしている。今日、世界中に広がっている利己主義 (egoism、egoはラテン語で「わたくし」のこと) と、臓器移植の外科手術は、善し悪しは別にしてデカルトが本書で展開している思想に由来するとしてよいであろう。 (としまつ いさお/美学)



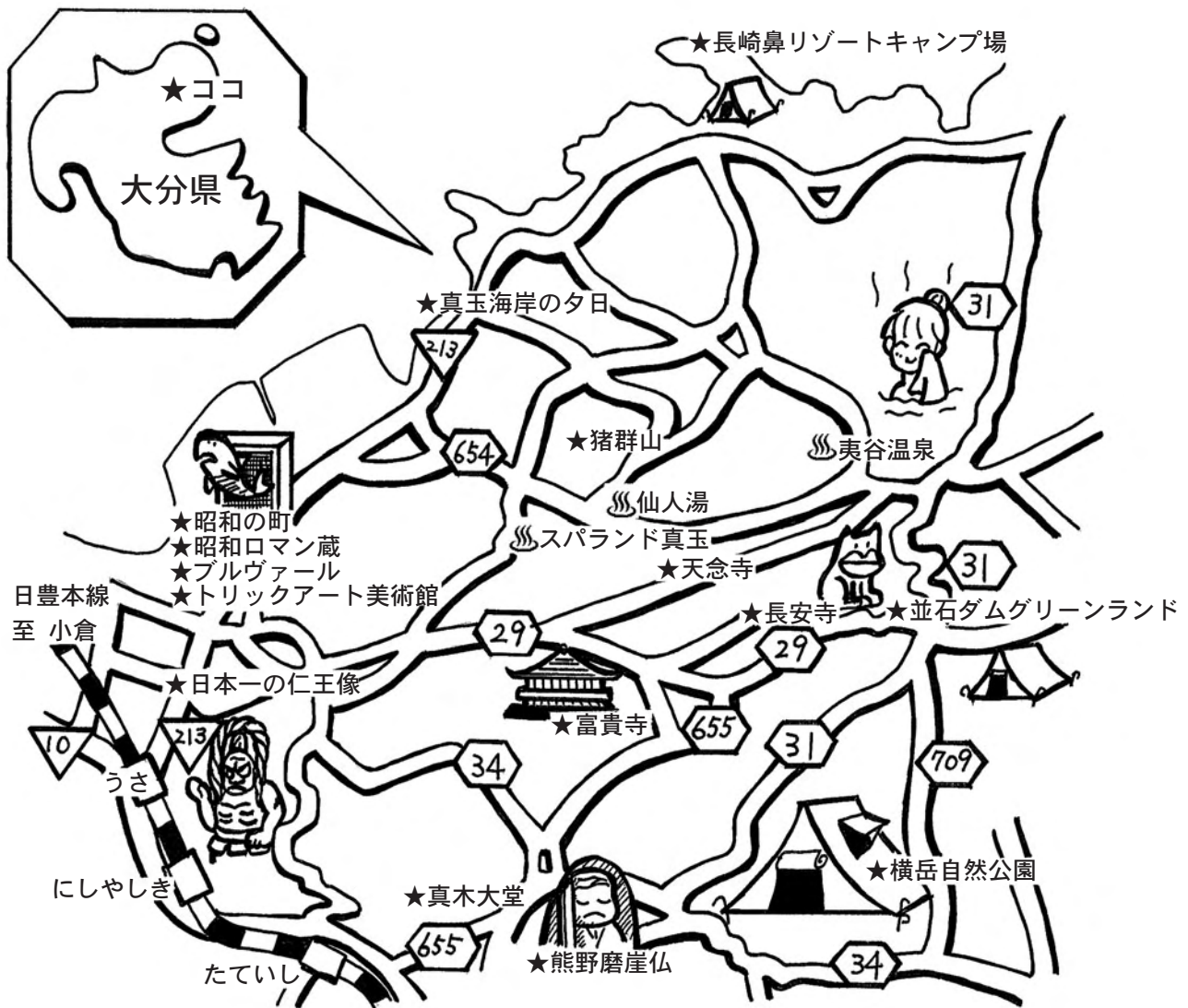
目 次

学長からのメッセージ	1
読書の秋もいけれど 行楽の秋も楽しみませんか? ...	2
おすすめの1冊	4
試聴室へ行こう! ~試聴室おすすめのディスク~ ...	7
ツッチーコーナー	8
新着図書案内	9
この本、読んでみて!	11
職員のつぶやき	11

読書の秋もいいけれど

行楽の秋も楽しみませんか？

～ 豊後高田編 ～



大分県の北部に位置する『豊後高田市』は、2005年3月31日に西国東郡真玉町、香々地町と合併して新市制による『豊後高田市』となりました。

「豊後の秘境」「山岳密教の地」とも言われ、六郷満山文化に彩られた史跡や、海岸など、自然景観の美しいところです。

六郷満山仏教文化など、あまり馴染みがないかもしれませんが特色は「石仏」に象徴される石造物。豊後高田は、石造りの仁王像の数が日本一です。

そんなロマンあふれる豊後高田の見所を観光を含め、図書館の本を元にご紹介します。詳しい資料については図書館にありますので、参考にして下さい♪

● 文 化 財 ●

◇富貴寺（ふきじ）	
豆知識	国宝指定。九州最古の木造建築物。秋はイチョウ・紅葉が楽しめます。
◇熊野磨崖仏（くまのまがいぶつ）	
豆知識	国指定重要文化財。鬼が1夜で築いたとされる乱積みの石段を上ると、日本最大級スケールの磨崖仏があります。
◇天念寺（てんねんじ）	
豆知識	伝統行事「修正鬼会」が行われるお寺。天念寺の前を流れる川には、水害除けに刻まれたと思われる「川中不動三尊像」があります。

◇真木大堂（まきおおどう）	
豆知識	保存されている9体の仏像すべて国の重要文化財です。
◇長安寺（ちょうあんじ）	
豆知識	太郎天・二童子像は国指定重要文化財。思わず笑いたくなる、日本一？唇の分厚い狛犬がいます。秋は紅葉も楽しめます。
◇日本一の仁王像	
豆知識	豊後高田市内に数多く存在する石造仁王像のシンボルとして、国道213号線にある仁王像。高さ4mで日本一。

● 観 光 ●

◇昭和の町（しょうわのまち）	
豆知識	昭和30年代の建物が、そのまま再現され、懐かしい「昭和」を感じることができます。
◇昭和ロマン蔵	
豆知識	昭和10年に建築された農業倉庫を改築した建物。懐かしい玩具が5万点以上も展示。駄菓子や昭和絵本の展示施設や和食レストランもあります。

◇トリックアート「不思議な美術館」	
豆知識	額縁から手や足がはみ出て見えたり、立体的に描くことで、見ている人が錯覚を起こす、ユーモアのあるビックリ美術館です。
◇カフェ&バー『ブルヴァール』	
豆知識	昭和の町の商店街でも有名な、懐かしい『学校給食』が食べられるお店です。器にもアルマイト器を使うと言うこだわりのお店です。

● アウトドア ●

◇横岳自然公園	
豆知識	横岳自然公園内には「鹿公園」もあり、山頂からは国東半島を一望でき、ログハウス、天体観測施設、ロッククライミングコースもあります。
◇並石（なめし）ダムグリーンランド・こっとん村	
豆知識	並石ダムの湖畔にある宿泊所。食堂や、多目的の広場もあり、バス釣りやキャンプも楽しめます。

◇長崎鼻リゾートキャンプ場	
豆知識	水平線を180度見渡せる展望台があり、ログハウスにバンガロー。キャンプにはもってこいの場所です。
◇猪群（いのむれ）山	
豆知識	標高約458m。登山口から約50分で山頂に到着できます。ストーンサークルもあり、市内有数の山歩きのコースとして知られています。

● その他の施設 ●

◇夷谷温泉（えびすだにおんせん）	
豆知識	鉄分たっぷりの茶褐色の温泉。こじんまりとした施設ですが、泉質が良いと評判でドライブで疲れた体を癒すにはぴったりかも…
◇ほうらいの里 仙人湯	
豆知識	ログハウス造りのオシャレな温泉館。別名「美人湯」とも言われ、お湯が柔らかく、お肌がツルツルになると言われています。

◇真玉海岸の夕日	
豆知識	「日本夕日百選」に選ばれている夕日。絵に描いたような美しさに魅了され写真愛好家にも人気のスポットです。
◇真玉温泉 スパランド真玉	
豆知識	大浴場をはじめ、露天風呂、ジャグジー、寝湯、ラジウムサウナなどがあり、毎分400L自噴する豊富な湯量が自慢の温泉施設です。

◇参考図書◇

豊後高田の歴史 (092.22/B89) GUIDE-O (092.9/O34) 国東古寺巡礼 (092.2/W46)
O-BOOK 大分ガイド (092.9/O34) まるごと大分 (092.91/O34)

おすすめの一冊

※取り上げられた本は、附属図書館に所蔵もしくは所蔵予定です。

大竹伸朗の強烈な制作衝動『路上のニュー宇宙』

(大竹伸朗展実行委員会 2007年)

美術科 吉村 正 郎

この間、友人と連れ立って大濠公園にある福岡市美術館で行われている大竹伸朗の「路上のニュー宇宙」展を観にいった。驚いたことにいきなり美術館が宇和島駅に変身していた。というのは、過去に宇和島駅で使われていたであろうネオンサイン状のキャンバスが美術館の正面玄関2Fのひさしに取り付けであり、この美術館が宇和島駅ではないかと思えるくらいイメージの変革がなされていた。また館内に入るやいなや、巨大な作品の数々が設置され、よく見ると、作品に使用される素材の大半が、多分かつて何かの目的で作られ使われていたであろうもので、時とともに役目が終わり今はもう放置され捨てられる運命にあるものであった。

彼はそれらに目を向け執拗に集積し、自由自在にあやつり構築し、彼の手によりそのおびただしい断片の数々が再び息を吹き返し、新たな芸術として生み出している。写真や廃材、また印刷物にいたるまで、日常の様々な素材がスクラップされ平面、立体にいたるまで強烈な制作衝動により濃厚な生命力を持っていて、人の無意識の気配や時間の膨大な傷跡なども凝縮されている。またショーケースに展示されているスクラップブックはゴミとしか形容できないものの断片が、整然と並べられて存在するわけではなく雑として集積し、その雑が粹付けされているところに彼独自の手法があった。

網膜と題されたある作品では、風雨にさらされたようにはがれたセロファンテープなどがひらひらと空間にゆらめいてヤニ色に変化している様を一瞬に見た時、日本の美意識であるはかないもの、うつろいゆくものにひかれる和の心がひたひたと押し寄せてきた。

彼のそんな作品に接していると永遠という時間感覚が、実は一瞬の凝縮という相反すると思えるものによって表現という行為が成り立つという確信をあたえられ、私にとっては大変興味のある、気になる作家の一人になったのである。

(よしむら まさお/工芸染色)

菅野由弘 音空間『水の風景』

(ミサワレーベルCDシリーズ CSD-18 1994年)

音楽科 松倉 利之

これは「ミサワホーム」が環境音楽として制作したシリーズの中の一冊です。私達演奏家はCDを聴くのは鑑賞の為ではなく、勉強や演奏の仕事の準備の為という場合が殆どだと思います。

ましてや自分が録音に参加したとなると、ミスが無かったか？ という粗探しが中心になって、楽しんで聴こうなどという気分にはとうていありません。ところがこのCDは私自身が録音に参加したにも関わらず、かなり時間が経っているせいかゆったりした気分で聴く事が出来ます。

菅野由弘氏は私と同世代の作曲家で、何度も一緒に仕事をしています。音素材としては日本の楽器：龍笛・尺八・箏・排簫（ハイショウ：正倉院に眠っていた古代の楽器）、多数の打楽器（木、金属が中心）が使われていて電子的な音は一切ありません。そして作曲家自身が五月の早朝に奥日光の森の中を散策しながら録音した水の音・木々のそよぎ・鳥の鳴き声に加えられています。

器楽の録音はNHKのスタジオを使って行われましたが、演奏家が一度に全員集まるのでは無く、いくつかのグループに分かれ時間を区切って別々に演奏しました。

ですから、奏者は曲全体の構成がどの様になるのか全く判らない状態で音を出す事になります。さらに、作曲家から「こんな感じの音が欲しい」という説明を受けますが、ちゃんと書かれた楽譜は無く時間だけが設定されていて後は奏者の即興に任せるという方式が採られました。

打楽器奏者二人だけで演奏し、相手の音と重ならない様に、間の空け方が一定にならない様に、自身の感性を研ぎ澄まして一音一音を大切に演奏した記憶があります。何ヶ月か過ぎて出来上がったCDが送られて来ました。

そして封を開けて実際に聴いてみて初めてどんな物なのか判ったのですが、その時はやはり粗探し状態なので鑑賞するという気分ではありませんでした。

何年か経って、ふと思い出してもう一度聴いた時に初めて「音を味わう、楽しむ」という気持ちになりました。

私は最近予定が何も入っていない休日に朝ゆっくり起きてストレッチをしながらこれを聴いています。約40分程ですが、老化がそろそろ始まっている私にはとても優しく感じられます。皆さんも一度聴いてみて下さい。

(まつくら としゆき/打楽器)

岡田暁生著『西洋音楽史「クラシック」の黄昏』

(中央公論新社、2005年)

国際文化学科 山本 聡 美

痛快に面白い。出版以降、各種書評(新聞やインターネット)で取り上げられているので、特に音楽科の学生の中には既に興味を持って読んだ方もいるでしょう。でもこの本を、日頃音楽(特に、括弧付きで「クラシック」)に敷居の高さを感じている(であろう)美術科や人文系学科の学生にこそ読んで欲しい。この本は、かつて神戸大学、そして現在は京都大学で音楽史を講じている筆者が、大学の一般教養での講義を通じて抱いた

—たとえば音楽学校でピアノを学んでいて、バッハより以前の音楽に少し興味をもちはじめた学生。歴史的なことに興味がある一般的なクラシック音楽ファン。美術鑑賞が好きで、その関連で音楽史も少し知りたいと思っている人。そんな人たちが手軽に音楽史の流れを理解できるような本は、いまどき皆無だといっても過言ではない。(本書「あとがき」より) —

という思いから生まれた。逆に言うと、そういう人(まさに芸短に暮らす我々のことだと思いませんか)に向けて書かれている。だからといって、素人向けに口当たり良く希釈された通史ではなく、グレゴリオ聖歌が「紙に書かれるようになる」(楽譜に相当するものが成立する)9世紀から、モダン・ジャズの成立する20世紀までの西洋音楽の大河を、一気呵成、かつ繊細な筆力で説き明かしてくれる。

本書の中でしばしば西洋美術の歴史が言及されていることは、美術史学を生業とする(そして人生のごく早い段階で、楽器のトレーニングにちっとも適正がないことを悟ってしまった、譜面も読めない)私には大変有り難いものであった。例えば本書の「ルネサンスとは、音楽がわれわれが考えているような音楽になった時代」という指摘は、そのまま「…美術がわれわれが考えているような美術になった時代」とパラフレーズすることができよう(実際本書のルネサンス音楽の章では、音楽の話の前にレオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロ、ブルネレスキ設計のフィレンツェのドウオーモが登場する、蛇足なが

ら日本美術史を専門とする私は、さらにルネサンス=室町時代と置き換えて楽しむことになる)。このようにして、筆者は各時代の音楽を、宗教・文化・社会の網に掛けて捕捉しようとする。だから、読者は、自分の関心(歴史だったり、宗教だったり、美術だったり、心理学だったり、メディア論だったり)に従って「クラシック音楽」を理解することができるはず。

また例えばベートーヴェンの章。その同時代的背景に、ヘーゲルやマルクスやダーウィンを生んだ、19世紀的な進歩史観、あるいは啓蒙主義とその帰結としてのフランス革命を指摘し「《第九》における『すべての人々が参加できる祝典』は、ほとんどシュプレヒコールすれすれの単純化と集団化によって可能になったといえ、誇張が過ぎるだろうか」と評す。本書の各章では、生まれた時代の空気や思考を伴った音楽が、生き活きと飛び跳ねているように、日頃、美術史学の講義に際して学生には「歴史背景の中で作品(作家)を理解しろ」と言っているくせに、音楽に関しては録音やコンサートによって切り取られた世界に終始していたことを猛省。そして読後に、無性に音楽が聴きたくなりました(本書では、随所でCDが紹介されています)。

そういう訳で、音楽科の学生には美術や歴史にも関心を持ってもらいたいし、美術科の学生や人文系の学生が、せっかく芸短にいますので、音楽にももっと関心を持つと良いなと思い、この本を紹介しました。¥780-なので買って読むと良い。中公新書の1816番。

(やまもと さとみ/日本美術史)



天満敦子『わが心の歌 望郷のバラード』

(文藝春秋 2000年)

情報コミュニケーション学科 下川正晴

韓国ならチョン・キョンファ、日本なら天満敦子。情熱的な演奏をするバイオリニストが好きだ。キョンファが1979年に録音したベートーベン「バイオリン協奏曲」は、何度聞いても飽きない。

天満さんに会ったのは、5年前である。彼女が定宿にしている東京都内のホテルでインタビューした。その時の記事（毎日新聞朝刊02年6月18日「ひと」）

「バイオリンを抱えて、走り続ける人生かしら」。ため息交じりの一言を見出しにとった。自伝的な著作「わが心の歌」に描かれた井上光晴（作家）丸山真男（政治学者）らとの遭遇は、「ドラマのような楽しさ」があると紹介した。

このインタビュー、実は、個人的な裏話がある。あつかましくも「幕張のミニ・ホールで演奏していただいけませんか」と頼んだのだ。ぼくたちは当時、住民の力を結集して作った音楽ホールにコンサートピアノを購入する運動をしていた。説明を聞いた彼女は、いとも簡単に「協力しますよ」と返事してく

れた。やったあ！「演奏後はガンガン飲むわよ」。もちろんです！

コンサート当日、収容200人ほどのホールは超満員だった。圧倒的な迫力。ストラディヴァリウスの音が、聴衆の体を突き抜ける。演奏者の顔、噴出す汗が眼前にある。ホールの設計者も感激の面持ちだった。

この時、ピアノ伴奏をしていたのが吉武雅子さんである。清楚な印象の女性。本学に赴任後、彼女が行天正恭准教授（声楽）の奥様であると知り、その奇縁に驚いた。＜人生の出会い＞。「わが心の歌」全編を貫く強いメロディは、大分の地にも脈々と流れていると確信した。

今回、「わが心の歌」を読み直した。傑作である。音楽を愛する人たちの人生には、全人格を揺さぶる感動がある。音楽プロデューサー中野雄さんの手腕にも驚嘆した。天満敦子、吉武雅子、中野雄。「3人をぜひ大分にお呼びしたい」。ぼくはこの秋、ひそかに決意した。

(しもかわ まさはる／

メディア論・韓国論)



試聴室へ行こう!

～試聴室おすすめのディスク～

リヒター指揮 バッハ：ミサ曲口短調 RICHTER/BACH/ MESSE IN H-MOLL

グンドゥラ・ヤノヴィッツ (ソプラノ)
ヘルタ・テッパー (アルト)
ホルスト・ラウベントール (テナー)
ヘルマン・プライ (バリトン)
ミュンヘン・バッハ管弦楽団&合唱団

DVD432

音楽科 小川伊作

■収録：1969年9月、クロスター教会

今回ご紹介するのは、バロック音楽の大家ヨハン・セバスティアン・バッハのミサ曲です。という「あれ？」と思われる人がいるかもしれません。なぜならミサはキリスト教のカトリックで行われる典礼の名称であり、バッハはプロテスタントのルター派の信者であり同派の教会に勤めていたのですから。実はこのミサ曲、作曲のきっかけは典礼のためではありませんでした。自分の処遇に不満だったバッハが、より社会的に高い地位—この場合はドレスデン宮廷作曲家の肩書き—を得るために作曲をしたというのが本当のところでした。そして献呈先のザクセン侯がカトリックであったというわけです。ただその時(1733年)はまだミサ通常式文の第1章「キリエ」と第2章「グローリア」しか作曲されておらず、これ以降は「サンクトゥス」をのぞき、バッハの晩年に書かれました。

このようなわけで研究者の中には、このミサ曲口短調を完結した一つの作品とは見なさない、という極端な意見もあるほどです。けれども私たちにとっては、事情がどうであれ、バッハの残した貴重な音楽作品であることに変わりはなく、その音楽的価値が減じるものではありません。

実はこのディスクをとりあげた理由は、曲がバッハの作品である以上に、指揮をしているのがリヒターであることによるところが大きいです。1926年10月15日ドイツに生まれたカール・リヒターは、22歳の若さでバッハが生前楽長を務めていた聖トーマス教会のオルガニストに就任しています。その点からもリヒターとバッハの関係は因縁浅からぬものを感じますが、1951年リヒターはミュンヘンに移り、ミュンヘン・バッハ合唱団とミュンヘン・バッハ管弦楽団を立ち上げ、その後の生涯をバッハの演奏に捧げるこ

とになります。

このディスクに聴くリヒターの指揮は「峻厳」という形容詞がぴったりあてはまります。バッハの音楽が持っている、厳しさ、構築性を際立たせた、けれども情熱を感じさせる演奏といえるでしょう。独唱陣も往年の名歌手が名を連ね、このディスクの魅力を増しています。

1969年には合唱団・管弦楽団とともに初来日をし、1979年に2度目の来日を果たします。1981年には54歳の若さで心臓麻痺によって世を去ります。

時代的にはちょうど古楽(バッハの音楽はバッハの時代の楽器と奏法で演奏するというコンセプト)が台頭し始める時期に当たりますが、リヒターは終生通常の(モダンの)楽器による演奏を貫きました。しかし今聴いてあらためて感じることは、モダンだ、古楽だというのは、所詮方法論、手段の違いにすぎないということです。時空を超え、手段の違いを超え、再生装置の向こうから響いてくる音楽のなんと普遍的なことでしょう。このディスクの楽しみは、作品と演奏だけにとどまらず、録音会場となった教会の内装の美しさも見る人の目を楽しませることでしょう。

なおこれはリヒターの一連の映像記録をもとにしたもので、図書館には他に「マタイ受難曲」、「ヨハネ受難曲」、「ブランデンブルク協奏曲」、「リヒターの遺産」と4種のディスクがあります。また録音資料はアルヒーフレーベルの全録音もあります。

やさしさ、いやしが求められる今日この頃ですが、たまにはこのような硬派の音楽もいかがですか。もっとも聴く前に心構えをしっかりとしておく必要はあるかもしれません。

(おがわ いさく/音楽学)

ツッチーコーナー

ピアニスト

教務学生グループリーダー 土田 一彦

ここだけの話だが、クラシック音楽が大の苦手だ。母親が日本舞踊を教えている関係で、物心ついた頃には長唄清元常磐津と和モノの音楽が家中に鳴り響いていたし、中学時代はビートルズの全盛期、高校・大学はフォークブーム、成人後もロックやジャズばかりで、要するに私の人生のどこをどうひっくり返しても、シューベルトショパンベートーヴェンとすれちがったこともないし、ラフマニノフに至っては最近まで早口言葉かロシアの地名だと思っていた。

だから数年前、某ピアノコンクールの事務局勤務を命じられたときは、サプライズ人事も極まれりと思っただが、周囲を見回しても、直属の上司は演歌一筋の人だったし、部下はいい年こいて「加護ちゃん可愛いっすね」、まあ一人だけ音大出のプロパー職員がいたのが救いというか頼みの綱だったわけで。

世界的に著名なピアニストS先生の名前を冠したコンクールは、1次予選から本選まで音の泉を1週間借り切って行われる。がらんとしたキャパ700の客席中央に審査員10名+お世話係の私が陣取り、入れ替わり立ち替わり、数十人のピアニストの卵たちの演奏を延々と聴かされる。卵たちは緊張の極み、特攻隊みたいな決死の顔つきで全力疾走いや演奏か、勢い余って爪が割れ、白鍵を血に染めた人もいる。

座っているだけで腰は痛い耳鳴りはしてくる煙草は吸えないスタンバイミーが聴きたいイマジンを聴きたいもう氷川きよしでもいいやと禁断症状に身悶えする。カルト教団の修行に確かこんなのがあった。

堪えきれずに舞台袖に避難しても、知事室との連絡、出番を忘れ行方不明の出場者捜し、急な取材に答えたりと、目眩がするほど雑用が待ち構えている。

1次予選は課題曲の中から4曲演奏。10時開始、昼食と休憩をはさんで夜8時頃まで、これが2日間続く。演奏が終わると審査票を回収して集計、オリンピック方式とかで平均点を出し、得点順に並べ替え、大きな模造紙に手書きして審査会場に持ち込む。

審査員のうち日本人は半数で、後は独仏露加中と雑多な国籍なので、審査会の共通言語は英語。ただ一人英語のわからない私はあいまいな微笑を浮かべて茫然と同席するのみだ。やがて結論が出たらしく、委員長がS先生が一人ずつYou OK? You OK? と確認し、That's all right とか言う。そして私に向かって「じゃあそういうことだからよろしく」。そこだけ日本語で言われてもなあ。

審査結果が出ると報道各社に一斉FAXし、また模造紙に張り出して翌日の練習予約を受け付ける。

3日目の2次予選は40分以内で課題曲2曲演奏。

4日目3次予選はロマン派、現代作品、ドビュッシー他の作品から計3曲を45分で。

5日目はお休み。審査員は連日の缶詰状態からの息抜きに、マイクロバスで湯布院その他をミニ観光してランチ。同乗する私は息抜きどころではない。共通の話題なんて皆無だし、音楽家の皆さんって時間に無頓着なのか、すぐ迷子になってしまうのだ。

6日目4次予選はモーツァルトの協奏曲を関西のオーケストラと競演。この1日で500万が飛ぶ。

最終日の本選は観客を入れて九州交響楽団と。審査結果が出ると表彰式のセッティング、息つく間もなくフェアウェルパーティーの準備。山海の珍味が並んでいるのを尻目にジュース一杯飲んで、来賓や受賞者を案内、式進行を見届けながら取材をさばく。1週間が終わると、澱のような疲労が溜まっていた。

ある年、何から情報を得たのか、日本と国交のない国から一人の少女が応募してきた。入国管理局や法務省に出向いての煩雑な手続きに時間を取られ、猫の手も借りたい時期にと、正直舌打ちしたい気分だった。日本での身元引受人になる親戚の男性が必要書類を持って来た。来日するのは少女とその父親、それに指導教官という肩書きの女性の3人で、コンクール参加と祖父の墓参りを兼ねた滞在中の予定が、それこそ1時間刻みで事細かに記されていた。

コンクールの前日、出場者たちが次々に会場入りしてエントリーの手続きをする中に、少女の姿は見あたらなかった。夜になって親戚の男性から電話が入り、空港で飛行機を出迎えたが、3人とも乗っていない、詳しい事情はわからないと言う。

翌日1次予選の出番ギリギリまで待ったが、その後も連絡は取れず、棄権扱いとせざるを得なかった。

嵐のような忙しさの中で全日程を終了し、関係者を送り出してから、演奏会場の最終チェックに行った。客席の照明が消え、昼間の喧噪が嘘のように静まりかえったホールの舞台に、誰かの忘れ物のように、スタインウェイが1台ぽつんと置かれていた。

そのとき初めて、あの少女のことを思った。出場者たちの誰よりも強く、少女はこの舞台に立ち、ピアノを弾きたいと願っていたのだろう。あの国に住む彼女にとって、ピアノは「自由」や「希望」と同義語であったかも知れない、そんなことを思った。

何年か後にピアノコンクールは休止し、S先生もすでに鬼籍に入られた。私は職場を2つ替わった。

今でも、仕事を終えて家路に向かう時、ふいに音楽棟から聞こえてくるピアノの音に、思わず振り返って、会ったこともない少女の姿を探ることがある。

新着図書案内

	NDC	書名	著者名	出版社	出版年	配置場所	価格
	002.7/G72	知の遠近法	ヘルマン・ゴチェフスキ	講談社	2007. 4	第3閲覧室	1,500 ^円
	002.7/Ma81	大学生のための「読む・書く・プレゼン・ディベート」の方法	松本 茂 〔ほか〕	玉川大学出版部	2007. 3	第3閲覧室	1,470
※	021.4/P97	プロとして恥ずかしくないデザインの 大原則=The principle of graphic design		エム・ディ・エヌ コーポレーション	2005. 2	第3閲覧室	1,600
	069.7/I97	大学博物館事典：市民に開かれた知 とアートのミュージアム	日外アソシエーツ編集	日外アソシエーツ	2007. 8	第3閲覧室	9,800
	108/Sa27/5	「日本」への視線、思考の文体	坂部 恵	岩波書店	2007. 3	第3閲覧室	4,400
	141.6/Ka98	「悩み」の正体	香山 リカ	岩波書店	2007. 3	第3閲覧室	700
	146.13/F46/18	自我とエス；みずからを語る：1922 -24年	〔フロイト著〕	岩波書店	2007. 8	第3閲覧室	4,400
	148.8/C91	誕生日大全	サッファイ・クフロード 〔ほか〕	主婦の友社	2005.12	第3閲覧室	2,800
	159.6/B18	女性の品格：装いから生き方まで	坂東真理子	PHP研究所	2006. 1	第3閲覧室	720
	210.5/N48	大名廃絶録	南條 範夫	文藝春秋	2007. 7	第3閲覧室	670
	219.9/A49/2	沖縄戦はなぜおきた？	安斎 育郎	新日本出版社	2007. 1	第3閲覧室	1,800
	274/Y24	グアムと日本人：戦争を埋立てた楽園	山口 誠	岩波書店	2007. 7	第3閲覧室	740
	302.2/Te21	韓国のイメージ：戦後日本人の隣国観	鄭大均 著	中央公論社	1995. 1	第2閲覧室	740
	312.1/G34	日本の基本問題	現代の政治・経済 を考える「櫻の会」	勁草書房	2007. 6	第2閲覧室	2,800
	314.8/Su19	選挙違反の歴史：ウラからみた日本の 100年	季武 嘉也	吉川弘文館	2007. 7	第2閲覧室	1,700
	319.1/Ko67	中国「反日」の虚妄	古森 義久	文藝春秋	2007. 7	第2閲覧室	560
	327/N15	裁判官の爆笑お言葉集	長嶺 超輝	幻冬舎	2007. 3	第2閲覧室	720
	333.8/Y31	国際協力の現場から：開発にたずさ わる若き専門家たち	山本 一巳 〔ほか〕	岩波書店	2007. 5	第2閲覧室	780
	369.3/Sa32	地震の時の料理ワザ：グラッと来てあわてない！ ：防災袋に必携!!：電気が復旧するまでの1週間	坂本 広子	柴田書店	2006. 8	第2閲覧室	950
	377.2/Te19	ムサビ日記	手羽イチロウ	武蔵野美術大学出版局	2007. 7	第2閲覧室	1,200
	382/Ay98	失われる文化・失われるアイデンティ ティ	綾部 恒雄	明石書店	2007. 2	第2閲覧室	4,800
	460.4/H39	おとぎ話の生物学：森のキノコはな ぜ水玉模様なのか？	蓮実 香佑	PHPエディターズ ・グループ	2007. 5	第2閲覧室	1,400
	479.7/Ki17	新日本の桜	木原 浩	山と溪谷社	2007. 3	第2閲覧室	4,200
	489.9/Ka96	おさるのサヤカはお母さん	河野 光治	新潮社	2007. 2	第2閲覧室	1,100
	491.8/A12	体をまもるしくみ事典：病気になる ないための	安部 良	成美堂出版	2007. 7	第2閲覧室	1,400
	492.2/N77	救急蘇生法の指針：市民用	日本版救急蘇生ガイド ライン策定小委員会	へるす出版	2006. 6	第2閲覧室	1,260
	519/E21	地球のためにわたしができること	枝廣 淳子	大和書房	2007. 5	第2閲覧室	1,300
	596.7/O33	おいしいお茶の基本：日本茶・紅茶・ ハーブティー・中国茶・コーヒー		世界文化社	2006. 2	第2閲覧室	1,300
	597/O89	インテリアを成功させるヒント201： Idea & solution for wonderful interior		トソー株式会社 トソー出版	2006. 6	第2閲覧室	1,800
	601.1/I24	まちづくりと共感、協育としての観 光：地域に学ぶ文化政策	井口 貢	水曜社	2007. 3	第2閲覧室	2,500
	650.4/Ta84	割り箸はもったいない？：食卓から みた森林問題	田中 淳夫	筑摩書房	2007. 5	第2閲覧室	680
	702.1/Mi21	世界に誇れる日本の芸術家555	三上 豊	PHP研究所	2007. 3	第1閲覧室	880

図書館だより No.9(2007.11)

	NDC	書名	著者名	出版社	出版年	配置場所	価格
	702.1/Sa85	美術のアイデンティティー：誰のために、何のために	佐藤 道信	吉川弘文館	2007. 3	第1閲覧室	3,900 ^円
	702/B42	この一冊で西洋と日本の美術がわかる本	美術鑑賞倶楽部	PHP研究所	2007. 7	第1閲覧室	680
	704/F41	視覚論	ハル・フォスター	平凡社	2007. 4	第1閲覧室	1,400
	720.4/Sh38	絵画のメディア学：アトリエからのメッセージ	島本浣、岸文和編	昭和堂	1998. 5	第1閲覧室	2,200
	723.5/U45	フリーダ・カーロ：歌い聴いた音楽	上野 清士	新泉社	2007. 7	第1閲覧室	2,000
	723/R45/1	14世紀から19世紀初期の傑作177点	パトリック・デ・リンク	創元社	2007. 6	第1閲覧室	3,800
※	726.1/N76/1	のだめカンタービレ（1～18巻）	二ノ宮知子	講談社	2002. 1	第1閲覧室	390
	757.3/Te57	Colors：色のデザイン	高柳ヤヨイ、スタジオ・ファクトリー・ツー	ソシム	2007. 4	第1閲覧室	2,100
※	757/I39	Design basic book：はじめて学ぶ、デザインの法則	生田 信一 〔ほか〕	ビー・エヌ・エヌ新社	2007. 3	第1閲覧室	2,500
	760/Mo16	音楽を「考える」	茂木健一郎 〔ほか〕	筑摩書房	2007. 5	第1閲覧室	760
	761.1/F56	響きの考古学：音律の世界史からの冒険	藤枝 守	平凡社	2007. 2	第1閲覧室	1,300
	761.2/A76	ありそうでなかった形から引ける音楽記号辞典	上田 桂司 〔ほか〕	ヤマハミュージックメディア	2007. 1	第1閲覧室	1,600
	762.3/I75	反音楽史：さらば、ベートーヴェン	石井 宏	新潮社	2004. 2	第1閲覧室	1,900
	762.3/Ta68	カルメンの白いスカーフ：歌姫シミオナートとの40年	武谷なおみ	白水社	2005.11	第1閲覧室	1,900
	762.5/J73	スコット・ジョブリン：真実のラグタイム	伴野 準一	春秋社	2007. 5	第1閲覧室	2,300
	766.1/O67	オペラと音響デザイナー：音と響きの舞台をつくる	小野隆浩著	新評論	2002. 6	第1閲覧室	2,000
※	774.2/B18/上	五代目坂東玉三郎	坂東玉三郎 篠山 紀信	講談社	2007. 4	第2閲覧室	38,000
	778.2/Mu43	ハリウッド100年のアラブ：魔法のランプからテロリストまで	村上由見子	朝日新聞社	2007. 2	第2閲覧室	1,400
	779.8/Su96	紙芝居は楽しいぞ！	鈴木 常勝	岩波書店	2007. 4	第2閲覧室	840
	781.4/Su96	すっきりヤせるヨガ：DVDで簡単！1週間プログラム	鈴木ももこ監修	マックス	2006. 6	第2閲覧室	1,200
	810/A49	世にも美しい日本語入門	安野 光雅 〔ほか〕	筑摩書房	2006. 1	第3閲覧室	700
	834/Ma81	速読速聴・英単語：Core 1900 ver.3：単語1400+熟語500	松本 茂 〔ほか〕	Z会	2007. 3	第1閲覧室	1,900
	899.1/Ta84	エスペラント：異端の言語	田中 克彦	岩波書店	2007. 6	第3閲覧室	740
	913.6/A58	ひとり日和	青山 七恵	河出書房新社	2007. 2	第3閲覧室	1,200
	913.6/A71	図書館危機	有川 浩	メディアワークス	2007. 3	第3閲覧室	1,600
	913.6/Sa13	眉山	さだまさし	幻冬舎	2007. 4	第3閲覧室	520
	913.6/Su87	アサツテの人	諏訪 哲史	講談社	2007. 7	第3閲覧室	1,500
	913.6/Ta63	変身	嶽本野ばら	小学館	2007. 4	第3閲覧室	1,400
	914.6/I91	林住期	五木 寛之	幻冬舎	2007. 2	第3閲覧室	1,400
※	915.6/O87	小生物語	乙 一	幻冬舎	2007. 4	第3閲覧室	900
	933.7/P93	奇術師	クリストファー・ブリースト	早川書房	2004. 4	第3閲覧室	940
	933/G15/上・下	グッド・オーメンズ（上・下）	ニール・ゲイマン、テリー・プラチェット	角川書店	2007. 3	第3閲覧室	1,890

☆平成19年4月から9月までの受入図書の一部を掲載しています。

☆その他にも新しく受入した本がありますが、それらは図書館ホームページ及び、図書館内の新着コーナーにあるファイルに記載しています。

※印の本はリクエストで購入した本です。

この本、読んでみて！

附属図書館長 凍田和美

4月から9月までに図書館が受け入れた新刊の中から3冊を紹介します。最初に紹介したいのは、ちくま新書から出版された「自己プレゼンの文章術」です。著者森村稔が、経験をもとに豊富な実例をあげて作文術のノウハウを解き明かします。進学試験の小論文対策に、就職の面接対策に読んでください。職場の挨拶や自己紹介を上手にしたいと考えている人にとっても強い味方になるでしょう。ちなみに、情報コミュニケーション学科の1年生10人の基礎演習のテキストにこの本を使いました。次に紹介したいのは、幻冬舎文庫の「小生物語」と武蔵野美術大学出版局の「ムサビ日記」です。いずれもネット上の日記が本になったものです。小生物語は、著者乙

一が日々の出来事を書きますが、現実と仮想が入り乱れていて、文章もテンポ良く進んでいきます。岡山出張の電車の中で時間つぶしにと持ち込んだのですが、時間の経つのを忘れて読みました。ムサビ日記は、武蔵野美術大学のOBでもあり、職員でもある手羽イチロウが始めたブログに書かれた27人の日記から選り抜いたものを大学の出版局が書籍化したものです。時間順に、学生さんの生活が日々繰り広げられます。ゲイタンもこんなことできないかなあと思いつきながら読みました。どうぞお読みになってください。図書館では、利用者の希望を取り入れて選書を行っています。リクエストを是非お寄せください。

(こおりだ かずよし/情報処理論)

職員のつぶやき

私が芸短附属図書館で勤務するようになって、半年が経過しました。大分に住んでいながら芸短を訪れたことが一度もなく、広い敷地の中にたくさんの棟があることにとても驚きました。久しぶりのキャンパスに私も1年生の様な気持ちで図書館勤務がスタートしました。昨年は公共図書館で働いていたこともあり、ここもそんなに変わらないだろうと呑気に構えていたのが大間違い！すぐに頭を悩ませることになりました。図書館システムが違う、書架の並びが違う、楽譜がある…など公共図書館と大学図書館の違いに気づいたのです。最初の余裕はどこへやら吹っ飛んでゆき、とにかく一から始めようと毎日の業務に向き合ってきました。とは言え、起こること全てが初めてで学生からの質問も分からず、対応があやふやになったり、待たせてしまったりと申し訳ないことばかりだったように思います。

私が図書館で働きたい一番の理由は本が好きで、図書館の持つ独特の雰囲気が好きだということです。なので、芸短図書館に来て一番に行ったのが文学の書架なのは言うまでもありません。そこで私はとても驚いてしまいました。何故なら公共図書館で予約待ち〇ヶ月当たり前な人気の本が書架に並んでいたからです。ちょうど春休みだったこともあるのですが、今人気のある本ばかりが読み放題という状況

に喜々としてしました。最近の文学作品は内容が現実的で、共感しやすいものが多く若い人でも読みやすいと感じています。本をあまり読まない人でもすんなりと入っていけるのではないのでしょうか。また、図書館には文学の他にもあらゆるジャンルの本があります。今まで知らなかったものを調べて見たり、手にとってみると興味が湧いてきたり意外な発見があります。新しい自分との出会いでもあります。今まで図書館なんてテスト勉強でしか行ったことがない、そんな人が本に夢中になってくれたらとても嬉しいです。大学生活は社会人になる前の貴重な時間です。学生の間に大いに図書館を活用して今後の人生に役立ててもらいたいです。そのためのお手伝いが出来るよう自分自身も日々頑張っていきたいと思います。

(附属図書館/坂口 真理)



大分県立芸術文化短期大学附属図書館
図書館だより No.9

発行日 2007年(平成19年)11月1日発行
編集・発行 図書委員会
大分県立芸術文化短期大学附属図書館
〒870-0833 大分市上野丘東1番11号
電話:(097)545-4235
ウェブサイト:<http://www.oita-pjc.ac.jp/library/> (図書館)
<http://www.oita-pjc.ac.jp/~tsdayori/> (図書館だより)
イラスト:美術科 デザイン副手 近藤 里美
印刷 (有)大分プリント社
